令和６年度（2024年度）第１回北海道史編さん委員会前近代小部会　議事録

日　時　令和７年２月６日（木）13:00～14:30

場　所　北海道立道民活動センター（かでる２・７）１階110会議室

出席者　谷本晃久小部会長、川上淳委員、越田賢一郎委員、中田裕香委員、松本あづさ委員、
蓑島栄紀委員

事務局　菅井室長、立澤主幹、吉原主査、髙桑主任

１　開会

菅井課長

○　それでは定刻となりましたので、ただいまから令和６年度第１回道史編さん委員会前近代小部会を開催いたします。

○　編さん室長の菅井でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

○　道史編さんの現在の状況ですが、『資料編１』の作業を進めておりますけれども、本年度をもちまして資料編３冊の刊行が終わりまして、来年度から通史編２冊の刊行を行う予定になっております。

○　通史編の刊行に続きまして、概説『北海道クロニクル』の刊行ということで、皆様方のこの前近代小部会では、そのうちの上巻を担当していただくことになっています。

○　本日は、令和９年度の刊行ということで、章立てなどにつきまして御審議をいただく予定としております。

○　なお、本日は、委員６名全員の出席をいただいておりますので、会議が成立をしていることを報告いたします。

○　それでは谷本小部会長に進行をお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

谷本小部会長

○　はい。皆さんこんにちは。お忙しいところまた、足元の悪いところお越しいただきありがとうございます。

○　これから議事に移って参りたいと思います。まず、最初に本日の議事の進め方等について、事務局の方からお願いいたします。

立澤主幹

○　配付資料のうち「出席者名簿」に誤記がありました。松本委員の担当が「近代」となっておりますが、「近世」の誤りです。お詫びして訂正いたします。

○　それでは、次第に沿ってご説明いたします。まず、「議事（１）北海道クロニクル上巻（是前近代）について」です。資料１になります。

○　この資料１は、谷本小部会長に作成していただいた資料になります。

○　まず、「１　仕様案」ですが、「道史編さん計画」では 400 ページと定められておりますところ、序や章節などの構成案、また、コラムを置くという御提案がありますので、コラムの数、１ページ何文字にするかなどの案が示されておりますので、意見交換をお願いしたいと思います。

○　次に、「２　章立て案」ですが、具体的な章立て案が示されております。これは各委員の皆様に分担していただき、現時点で取りまとまった項目を章節、また、コラムとして整理し、お示ししておりますので、意見交換をお願いいたしたいと思います。

○　次第に戻りまして、「議事（２）今後のスケジュールについて」です。

○　「道史編さん計画」上の令和 9 年度の刊行に向けて想定されるスケジュールですが、資料 2 に示しているとおり、当面、執筆の開始に向けまして、目次と執筆要領の案を作成し、企画編集部会と道史編さん委員会で審議する必要があると考えておりまして、本年 5 月頃に開催を予定しております企画編集部会に向けて、作業を進めていただくことを想定しております。
○　以上、資料に沿って説明いたしましたが、お手元に不足のある方はお知らせいただければと思います。
○　本日の進め方について、説明は以上です。

谷本小部会長

○　ありがとうございます。それでは、次第に沿って議事を進めて参りたいと思います。
○　まず、議事（1）ですが、北海道クロニクル上巻（前近代）について、議事を進めます。
○　資料 1 に沿って、御審議いただきたいのですけれども、資料 1 ですが、1 ページ目の最初のところに、「1　仕様案」という部分がございます。
○　これは、全体の構成のボリュームについて整理したもので、先ほど事務局からも説明がありましたように、前提として私たちが編集、執筆する北海道クロニクルの上巻は全体で 400 ページのボリュームを予定しているということで、大きさはＡ 5 判で白黒となっております。
○　これをざっくり分けると、前半、後半に分かれまして、前半は 15 世紀まで、主に物質文化を素材にして叙述される、これが前半で序から第 5 章（Ⅴ）まで、序は全体の序ですけれども、これが前半で、後半は第 6 章（Ⅵ）から、16 世紀以降ですが、ここは主に文献史学で組み立てられている部分となっております。
○　もちろん両者ともに物質文化、文献史料を活用するわけですけれども、方法論として前半と後半に分かれる形で議論をしてきたということです。
○　現在の章の数は、序を入れますと 10 までですので、11 となっています。節に関しては、全部単純に計算しますと序が 2 節になっていまして 42 ございます。それからコラムが 1 から 44 までですので、コラム数が 44 ということになります。これを前半と後半で分けますと、前半は序と 5 章、21 節と 23 コラム、後半は 5 章、21 節、21 コラムという案になっています。単純計算いたしますと、ここで書かれているように、1 節 8 ページ、コラム 1 ページと考えた場合は 380 ページ、1 節 8 ページ、コラム 2 ページとした場合には、424 ページということになります。大体、こういう目安で組み立てられることになろうかと思います。
○　重要なのは、1 ページにどれぐらいの文字数が叙述できるかということですけれども、これは、図などは全く考えずに文字だけで埋めた場合ですが、1 ページを、例えば 1 行 52 字、19 行で考えた場合、988 字となりますが、1000 字弱ということになります。1 節 8 ページですので、そんなにびっしりと書けるわけではないということになります。
○　これまで委員の皆様に検討いただいた章立て案を数字に落としますと、このようになります。
○　これについて、何か御意見、御確認すべき点などございますか。

越田委員

○　単純な話なのですが、前半の序で節が２つ入っていますよね。節の数がその後 17 なので、序を入れても前半の節の数は 19 になると思うのですが。

谷本小部会長

○　21 ではなく 19 ですね。分かりました、御指摘ありがとうございます。

○　後半は 21 で間違いないですね。そうすると、今すぐ計算はできませんけれども、これより少し余裕が出るってことになりますね。おそらく１節８ページ、プラスコラムが２ページでも、420 までいかなということになりますね。

○　ありがとうございました。この修正を含めて、何かご質問、ご確認等ございますか。

○　実際に、これが機械的にはめ込まれるというわけではなくて、大きいコラムも小さいコラムも、メリハリがつけて工夫することはできると思いますが、この 400 ページを超えない規模で議論して、最終的に確定させるということが重要ということで、御理解いただければと思います。

○　これは少し、機械的な話でございましたが、続けて「２　章立て案」について、確認をして参りたいと思います。

○　前半後半という形で分けましたけれども、前半については取りまとめいただいた蓑島委員から説明をお願いしたいと思います。

蓑島委員

○　それでは、これまでの意見交換を踏まえたたたき台を示していますけれども、前半の部分についてご説明します。

○　まず、章立ての序ですけれども、上巻の記述方針ということで、蓑島と谷本小部会長と連名で、担当者として名前が入っていますけれども、これは分担執筆というよりは共同執筆に近い形になるかもしれず、そこについては、まだ、意見交換の余地があります。

○　それと、これはあくまで上巻の序というのを想定していますけれども、基本的には上巻の序があって下巻の序があるということなのでしょうが、スタイルですとか下巻の序とも多少、すり合わせる必要があると考えております。

○　序の第１節が基本叙述姿勢の提示ということで、様々な歴史を書く上での歴史観、また、その整理、特に本書で意識している「北海道島」を舞台とする人々の地域史という論点について解説することになると思います。第２節としては、研究の歩みとして、前近代の北海道史の様々なこれまでの先行研究について、主要な論点や成果、課題についてまとめることにしております。また、コラム１として、時代区分をめぐる諸問題について解説しておく必要があると考えています。

○　続いて、第１章（Ⅰ）に参りますけれども、第１章は「北海道島の地質・環境と人々―人類の到達と、暮らしの背景―約 30000 年前から約 15000 年前」ということで、中田委員と越田

委員監修ということで想定しておりますけれども、第１節が「北海道島のなりたち」、地質のような議論、プレートテクトニクスといったことも入ってくるかもしれません。

○　第２節として「北海道島の環境」ということになります。この第１節と第２節については、地質と環境ということで１つの節にまとめるということも議論しております。これは後半に節を増やす、コラムを増やすかもしれないということと絡んで、どこかで調節した方が良いと思うのですけれども、第１節と第２節を１つの節にまとめるという可能性もありますので、ここも意見交換できればと思います。コラム２として「環境・気候変動と北海道島の前近代史」、コラム３として「理化学的研究と北海道島の前近代史」を載せています。

○　第３節として「旧石器時代の人々―北海道島とその周辺」、コラム４として「自然人類学研究の最新動向」、コラム５として「国宝・白滝遺跡群と黒曜石」ということです。

○　この章の執筆者については、現在まだ調整中でございます。

○　続きまして、第２章（Ⅱ）「定住生活の始まりと開花する文化―約 15000 年前から約 2400 年前ということで、越田委員と中田委員の監修でまとめる方向になっておりますけれども、おおよそ縄文時代に当たる時代を対象とする章であります。

○　第１節として「縄文時代の人々１　草創期～早期」、越田委員、中田委員、また、この時代は前の時代との関連性も深いので、その専門性を持つ方に入って担当いただくことで調整中となっています。コラム６として「「北海道島史」の地域性」（大型コラム）ということで、越田委員の執筆を想定しておりますけれども、これについて若干補足がありまして、地域性というと、北海道の地域的特色といったニュアンスが強くなってしまうと思うのですが、むしろここは、「「北海道島史」の地域差」の方が近いのかなと思いまして、ここも御意見いただければと思います。特に、道東北部と道西南部の時代を超えた差異性というところに焦点を当てますので、地域性というより地域差の方が良いかもしれません。通常より大きいコラムで時代を通して、ということを想定していますが、全体のバランスによっては普通のコラムにするということも考えられ、検討の余地があると思います。続いて、コラム７「海上の道」（大型コラム）で、やはり時代を超えた周辺地域との交流ということで、越田委員の執筆を想定しています。

○　第２節として「縄文時代の人々２　前期～中期」ということで、越田委員、中田委員の担当です。コラム 8 は「世界遺産・北東北の縄文遺跡群」ということで、執筆者は調整中、コラム９「縄文文化と新石器文化（定義、学史、周辺地域との関係）」ということで、これも執筆者は調整中です。

○　第３節「縄文時代の人々３　後期～晩期」ということで越田委員、中田委員の担当、コラム 10「国宝・函館市著保内野遺跡の土偶」の執筆者は調整中、コラム 11「ジェンダーと人の一生１」ということで、縄文時代に関する大型コラムになるかもしれませんけれども、越田委員、中田委員の担当を想定しておりまして、連名の部分は、先ほど申しましたように、基本的には、分担執筆ではなく、共同執筆の可能性、含みを持たせております。

○　第３章（Ⅲ）として「北海道島の人々の文化の独自化」ということで、概ね考古学的な続縄

文文化期にあたる時代を想定しております。約 2400 年前から５・６世紀ということで、監修が中田、越田、蓑島の各委員ということになり、第１節として「続縄文時代前半期の人々」は中田委員、越田委員が執筆を担当します。

○　第２節「続縄文時代後半期の人々」、コラム 12「本州北部の続縄文系文化」も中田委員、越田委員が執筆を担当します。

○　第３節として「オホーツク文化の形成」、執筆の担当は中田委員、越田委員ということになります。コラムを後半にふやす関係で、少し前半を整理する関係において、第３節が５・６世紀、時代的にはオホーツク文化の形成の時代になるわけですけれども、これだけで１節を設けるのは、やや前後のバランスからすると、バランスが悪いところもあるのかなということで、第３章の「第３節　オホーツク文化の形成」については、他の節とまとめるという議論の余地も残っていると思います。

○　第４章（Ⅳ）として、「北海道島の人々と北東アジア・倭・日本―７～12 世紀」ということで、中田、越田、蓑島が監修ということですけれども、第１節は「オホーツク文化の展開（刻文、沈線文、貼付文）」は、中田委員、越田委員、蓑島が担当し、第２節「擦文文化の成立と展開」ということで、中田委員、越田委員、蓑島が担当します。

○　第３節として「オホーツク文化・擦文文化の行方と暮らしの変容」ということで中田委員、越田委員、蓑島が担当、コラム 13 として「枝幸町目梨泊遺跡と恵庭市西島松５遺跡」ということで、中田委員、越田委員が担当、コラム 14「擦文期の木製品」、コラム 15「道東北の竪穴群の意味　海洋への進出」、コラム 16「ジェンダーと人の一生２―擦文とオホーツク」ということでいずれも中田委員、越田委員が担当としております。

○　第４節として、「東アジア古代国家と北海道島」という節を立てておりまして、ここは文献がメインになって前面に出る部分もありまして、蓑島、越田委員、中田委員が担当し、日本書記の粛慎や渡島の蝦夷、中国資料の靺鞨や流鬼などの記述はここで扱うことを想定しております。コラム 17 として、「東北アイヌ語地名の世界」、コラム 18「古代「えみし」とその背景」、コラム 19「交易の諸相―北の生き物と「宝」」、いずれも蓑島、越田委員、中田委員が担当する形で構想しております。

○　第５章（Ⅴ）については「北海道島の人々と北東アジア・日本―13～15 世紀」ということで、蓑島、越田委員、中田委員が監修となっていますけれども、およそ中世に該当する時期、考古学的にアイヌ文化期と言われているような時代への移行であるとか、その時代の大陸や本州との関わり、交流といったことの記述が想定される時期になります。

○　第１節が「土器製作の終焉と新しい文化」、こちらは越田委員、中田委員が担当し、コラム 20「厚真町の遺跡群」ということで執筆者は調整中です。

○　第２節「津軽安藤氏（安東氏）の盛衰と「夷島」」、コラム 21「中世日本の「えぞ」イメージ、第３節は、「元・明とアイヌ民族」ということで、樺太アイヌや千島アイヌにも言及することになると思います。これらは蓑島、越田委員、中田委員で担当します。

○　第４節「「道南十二館」の時代とコシャマインの戦い」蓑島、越田委員、中田委員が担当し

ます。コラム 22「宗教儀礼の系譜」は越田委員、中田委員、蓑島の担当になります。

○　コラム 23「発掘された館」ということで越田委員、中田委員が担当します。これはコラム 24 に「勝山館遺跡の世界」のコラムがありますけれども、それとは少し時期差を想定しており、いわゆる道南十二館と言われるような志苔とか矢不来といった内容が、想定されるかと思います。

○　ここまでが第５章までの内容となります。よろしく御審議をお願いします。

谷本小部会長

○　ありがとうございました。前半と後半で分けて議論しようと思います。

○　先ほど節が２つ減る話になりましたが、３つ大型コラムはどれぐらいのボリュームを考えていますか。

蓑島委員

○　２ページのコラムが普通だとすると、大型コラムは最大４ページを考えています。

谷本小部会長

○　先ほど２節分減少したページは３つの大型コラムのページに充てられて、その分ではページ数は超過しない形になりますね。

蓑島委員

○　そのような考え方もできますね。

谷本小部会長

○　今、前半部分の説明をいただきましたが、蓑島委員からいくつか議論をいただきたいという部分がありましたけれども、それを含めて御意見、御確認したいことなどありますでしょうか。

蓑島委員

○　私が申し上げた第１節と第２節をまとめるかというところは、これは調整中の執筆者の方の意向もあると思うので、ここでは決められないのかなと思っています。可能性を残しつつ継続審議のような形になるかと思っていました。

谷本小部会長

○　全体的な方針としてはこれを軸に進めて、調整中の部分は継続して検討し、定めていくということで、方向性としてはこれでよろしいでしょうか。

蓑島委員

○　細かいところですけれども、まだ、今日で確定ではないと思いますが、コラム６の「地域性」はひとまず「地域差」に直したほうがいいような気もするのですが。

谷本小部会長

○　監修する越田委員はいかがでしょうか。

越田委員

○　「地域差」でいいと思います。

谷本小部会長

○　ここは「地域差」という形で、今日の段階では変更したいと思います。

○　他にはよろしいでしょうか、

○　「オホーツク文化の形成」のところは、これからということでしょうか。

蓑島委員

○　後半の議論にも関わってくるので、また戻って議論することもありえますけれども、中田委員、越田委員、いかがですか。時代から考えると、５・６世紀に入れたいところですけれども、オホーツク文化の形成だけで１節丸々使うというのは、少しバランスが悪いかなという気もいたしますが。

中田委員

○　いつからオホーツク文化というかが研究者によって考え方が違うということですので、後の擦文の方が成立と展開になっていますから、オホーツクもそれに合わせたほうがいいのかなと思います。

蓑島委員

○　仮に「オホーツク文化の成立と展開」とするとした場合、第３章にまとめるか、４章にまとめるかという問題もあると思うのですけれども。

中田委員

○　これは、独自化というものをどのように考えるかということに関わってくると思います。オホーツクの場合だと、どちらかというと北方との関係ということになりますし、擦文が対照的に本州の方との関係になりますので、それを対比させる意味もあって、私は４章の方がいいのかなと思います。

蓑島委員

○　少し 4 章が重たくなりますけれども、３章が２節、４章が４節、絶対、無理ということはないと思うのですけれども、若干バランスは悪い気はしますが。

越田委員

○　中田委員の意見と少し違うところがあるのですが、鈴谷式の位置付けを、ここにどうしても入れたいという気がするのですよね。鈴谷から十和田への変化とか、北との繋がりが続縄文文化の頃にあるのだろうと思いまして、本州との繋がりだけでなく、北との繋がり、それから南千島諸島との関係もそれをまとめてここに入れておいたらどうかという気もしております。もう少し検討の余地があると思います。

中田委員

○　第３章は、実はコラムは１つだけなのです。他の章、特に４章はコラムもたくさんありまして、その点からいっても、少しバランスが、パッと見た瞬間に悪いとまでは申しませんけれども、検討の余地はあると思います。

蓑島委員

○　３章と４章の全体的なバランスということになりますでしょうか。

谷本小部会長

○　今の点も含めて、次の委員会まで、少しご議論いただくということでよろしいですか。

○　もちろん叙述を工夫すれば、このままでも構いませんけれども。

蓑島委員

○　承知しました。

谷本小部会長

○　よろしいでしょうか。また、後でまた戻って意見をいただくこともありますので。

○　後半について、第６章（VI）ですけれども、タイトルは「列島北方域と北東アジア・日本：16～17 世紀」、先ほども申し上げましたが、文献で叙述できることが増えてきますが、第１節は「「「近世」の「蝦夷島」とその周辺」、ここは私の担当になっています。コラム 24 は「勝山館遺跡の世界」これは川上委員に執筆をお願いしています。

○　第２節は、「カムイトクイと「国内静謐」」ということで私が担当します。蛎崎氏による道南の支配権の確立と、アイヌ民族に関する問題です。コラム 25 は「帆を下げる」ということで、川上委員にお願いをしています。これも今、申し上げたことの象徴的な部分であります。

○　第３節に関しましては、「松前藩の成立」、近世になってくるのですが、ここは松本委員にお願いしています。ここにコラム 26 で「蠣崎慶広と秀吉・家康」、日本の中央政府と道南の

勢力の関係ということですが、これも松本委員にお願いしています。コラム 27「本州北縁のアイヌ社会」、本州アイヌの問題ですが、これは川上委員にお願いをしています。これらが16、17 世紀の構成となっています。

○　続いて第 7 章（Ⅶ）です。「シャクシャインの戦いと松前藩」、ここは時代としては 17～18 世紀、申し忘れましたが、それぞれの章に責任者といいますか、取りまとめにあたっていただく方のお名前がありまして、ここは川上委員にお願いいたします。

○　第 1 節は「城下交易から商場交易へ」、松前藩とアイヌ社会との交易関係の変化に関して、これは川上委員にお願いをしています。コラム 28 は「ウイマㇺとオムシャの変遷」、アイヌ社会から見た関係になりますが、これを松本委員にお願いしています。

○　第 2 節は「日本市場とのつながり」、これは松本委員にお願いしています。松前と日本市場とのつながりです。第 3 節「松前藩制の整備と城下の繁栄」に関しましては、松本委員にお願いをしています。コラム 29 として「松前家の参勤交代」、江戸との間の参勤交代について、これも松本委員にお願いをしています。

○　第 4 節は「シャクシャインの戦いと戦後処理」、これは川上委員にお願いをしています。コラム 30 として「噴火・津波・疫病と人々」、災害史になりますが、これを松本委員にお願いしております。コラム 31 が「イウォルの概念」、近世アイヌ社会の領域概念に関して、私が担当になっています。

○　また、前半パートの方から、主に物質文化に関してコラムとして「発掘されたコタン」、「発掘されたチャシ」、「発掘された木製品」として、それぞれ実際に出た遺跡の名前がかっこに書かれていますけれども、これに関する物質文化上の説明するコラムを後半パートに入れてはどうかとの話があり、大体時代としてはこのあたりがメインになると思ってここに入れましたが、これに関して、後でご相談させていただければと思っております。

○　続けていきますが、第 8 章（Ⅷ）は「クナシリ・メナシの戦いと幕府の直轄」、これは 19 世紀の前半。ここは川上委員に取りまとめをお願いしておりまして、第 1 節として、「ロシアの南進と千島アイヌ」は川上委員に担当いただき、コラム 32 は「チャシの終焉」、コラム 33 は「イコトイと近藤重蔵」、イコトイはこの地域の有力なアイヌですが、幕府の役人である近藤重蔵との関係、これらのコラムも川上委員にお願いをしています。

○　第 2 節は「クナシリ・メナシの戦いと戦後処理」、ここのコラムは 1 つで、34「シサㇺとフレシサㇺ」、アイヌ民族から見た和人とロシア人に関するコラムを、それぞれ川上委員にお願いをしています。

○　それから第 3 節として、「山丹交易の管理と樺太アイヌ」、アムールとの関係ですね、これを私が担当することになっております。ここには、コラム 35 として「ヤエンコロアイヌ文書の世界」、国の重要文化財に指定されましたが、サハリンのアイヌの家に伝わった古文書の解説をここに入れることになっております。

○　第 4 節は「蝦夷地幕領と「異国境」の認識」として川上委員にお願いをしています。幕府の第一次直轄に関する問題です。コラム 36 として「アイヌ語と日露交渉」、初めての日本とロ

シアの交渉でアイヌ語が果たした役割について、川上委員に担当いただくことになっています。

○　第５節は「松前藩復領と場所請負制度の進展」、第１次幕府直轄が終わって松前藩に、一度領地が戻ってくるのですが、この時代を松本委員に担当いただき、コラム 37 で「狩猟と軽物」これは主に毛皮の話、これも松本委員にお願いして、コラム 38「漆器と蝦夷細工」、日本からアイヌの社会に入っていった漆器、アイヌ社会から日本社会、和風社会に出て行った蝦夷細工、これに関するコラムを谷本が担当するということになっています。

○　続いて第９章（IX）は、「開国から維新へ」、だんだん時代を刻んできておりますけれども 19 世紀の後半、ここは松本委員に取りまとめをお願いしております。第１節は「ペリー来航と箱館開港」、箱館が開港しますがこの時期のお話、また、コラム 39 は「アイヌ改俗政策の意図と実際」、当時、行われた風俗改めの政策を、いずれも私が書くことになっております。

○　それから、第２節としては「箱館奉行の蝦夷地経営」、第２次幕領期の話ですが、これは私が書くことになっています。コラムとしては、コラム 40「ヨイチ場所とソウヤ場所」、この蝦夷地経営の実際を、２つの地域を取り上げて、私が解説をすることになります。コラム 41 ですが、「松浦武四郎の蝦夷地踏査」、膨大な記録を残している松浦武四郎に関するコラムを、これはまだ、執筆者は調整中です。コラム 42 として「百物開工：幕末の殖産興業策」、これは箱館を中心に箱館奉行が実施した政策ですけれども、これも執筆者は調整中ですが、こういうコラムを立項しております。

○　第３節として、「幕末政治史と松前・箱館・蝦夷地」、これを松本委員にお願いして、いわゆる幕末維新期になります。コラム 43 としては「老中松前崇広」、慶応年間に海陸軍総奉行として老中になった松前崇広に関するコラムについて立項しております。執筆者は調整中です。

○　第４節としては「箱館戦争と榎本軍政」、箱館戦争後に、いわゆる「蝦夷共和国」と言われた、つかの間の時期ですが、この時代の経緯、これを私が書くことになっています。コラム 44 としては「松前城と五稜郭」、この時期に竣工した２つの、和風の城と西洋風の城、これは出土資料の問題を含めて、立項してございます。執筆者は調整中です。

○　最後に第 10 章（X）として、「蝦夷地と和人地、人々の暮らし」、ここで 16～19 世紀のいわゆる「近世」という時代の生活史の章を立てています。ここは、コラムはございません。

○　第１節は「アイヌと和人、弁別と呼称の歴史」、これはアイヌと和人という、いわゆる民族を言葉でどのよう区別がされたのかということの解説を、川上委員にお願いしています。

○　第２節は、いわゆる近世考古学というジャンルになりますけれども、「出土資料・物質文化から見た「近世」」ということで。ここは考古学ですから、越田委員と中田委員にお願いしています。

○　第３節は「アイヌ民族のヤウンモシㇼ／松前蝦夷地」と言うことで、アイヌ民族の民衆史を私が分担することになっております。

○　それから第４節は、「和人民衆の松前蝦夷地」は和人の民衆史、これを私が執筆することになっています。第５節は「ジェンダーと人の一生」で、女性史等も含めた全体史を松本委員にお願いしています。

○　以上、後半の部分のご説明を申し上げました、これに関して何か御意見等はございますか。
○　先ほどお諮りした第７章のところに３つのコラムを入れてあり、これはぜひ入れると良いと私は思いますが、この３つをどこに入れるかはまだしっかり固まっていませんけれども、３つのコラムを入れることについて、川上委員の担当でもありますが、いかがでしょうか。

川上委員

○　時代としてはこのあたりなので、入れたら良いと思います。越田委員、中田委員にお願いしたいと思います。

谷本小部会長

○　越田委員、中田委員に、後半にこれらのコラムを入れる場合には、お引き受けいただくということで入れることにします。
○　先ほど、２節分が減ったっていう情報がありましたが、大型コラムとこの３つのコラムを増やして、400 ページに収まる工夫、計算をしなくてはなりませんけれども、前半の部分で工夫の余地はありますか。

蓑島委員

○　3 つ考えましたのが先ほどと重なってしまいますけれども、第１章の第１節と第２節をまとめて１節分を削るとコラム３つ分ぐらい捻出できるかなということでそれが１つ、３つある大型コラムを普通のコラムにすれば、これも 3 つ分を捻出できるという考え方がもう 1 つ、あともう１つは、先ほど意見交換しました第３章第３節を独立させるか、どこかにまとめるかという話で、他にまとめれば１節減りますので、これらの３つが候補として念頭にありまして、余地はあるということになります。

谷本小部会長

○　後半部分だと例えば私のところ、第９章のコラム 40 をやめてしまうとか、１つぐらいは、ページ数削減の貢献はできるかなと思います。
○　事務局としては、この編さん計画の 400 ページというのは、どのくらい余地があるものなのですか。もちろんこれから図を入れたり、表を入れたりして、当然変わってくると思うのですけれども。

立澤主幹

○　編さん計画上は 400 ページの具体的な内訳がないので、そういう意味で言うと、いろいろ工夫をして、例えば参考文献などは後ろにまわすなどして、この 400 ページを、丸々執筆に充てるぐらいの形で編さん計画の趣旨を解釈して、予算の関係もございますが、最大限、そのような形で何とかできればということが、今のところページに関して申し上げられることにな

ります。

谷本小部会長

○　わかりました。それでは、計算上 400 ページにまとめる形で調整してみたいと思いますので、次回の小部会までに御相談させていただきたいと思います。

○　他はいかがでしょうか、前半と後半、両方お話しさせていただきましたので、その両方含めてでもよろしいです。

○　これから、そんなに時間はありませんが、３月に小部会をするということですね、いつになるかは分からないけれども、今日、全員で全部見ましたので、表現も含めてこなれていないところも、後で見返してみてあるかもしれませんので、お互いに意見交換などしながら、次回までに定めていって、次の小部会で定めたら、親会に上げていくので、基本的にフレーズも変えられないということになりますね。

立澤主幹

○　その点につきましては、現実問題として変わったものはあります。

蓑島委員

○　例えば、節題にも入っているのですが、「時代」とするか「文化期」にするかといった議論もあるのですけれども、そこも今回フィックスしなくても、変えられる余地はありそうだいうことでよろしいですか。

谷本小部会長

○　「続縄文時代」を「続縄文文化期」とするといったことですか。

蓑島委員

○　そうですね。

立澤主幹

○　最終的には親会である道史編さん委員会というところになりますので、例えば企画編集部会に両論併記で上げたことはないのですけれども、そういう、意見もあったという形で上げたりするなど、余地を残して説明のときに補足するやり方はあるかもしれません。

○　小部会案として決めますが、その後、議論を経て変わっていくことは当然ありますし、実際、これまでの道史の刊行でも変わってきています。

蓑島委員

○　わかりました。3 月まで固定できればいいのですが、その辺も調整が必要になります。

谷本小部会長

○　実際書いていく中で、変わっていくこともありますね。

立澤主幹

○　今後の審議の中で、そのような説明をしていけばいいと思います。ただし、ホームページには審議の経過が出ます。

谷本小部会長

○　説明はしなければならないということですね。

越田委員

○　パブリック・コメントは実施するのですか。

立澤主幹

○　パブリック・コメントは、道の基本的な計画、道民の権利義務に関わる条例など、対象が定められておりまして、それには当てはまらないものと考えています。道民の皆様からの御意見が寄せられることはあると思います。

菅井室長

○　ホームページを見ていらっしゃる方から、細かく内容を問われるような場面が全くないわけではないと考えております。

谷本小部会長

○　できれば3月までに、適切な項目名になるように進めたいと思います。

○　自分の担当のところで何か気になるところはありますか。

松本委員

○　自分の担当ということではないのですが、第7章に物質文化に関するコラムが入ることは良いと思うのですが、第 10 章の「第 2 節　出土資料・物質文化からみた「近世」」には関わらないで、こちらに置かずに第7章に置いた方が良いということでしょうか。

蓑島委員

○　基本的には、生活史ということで第 10 章の第2節で叙述するのだけれども、時代を通して、和人が残した資料での叙述の部分がかなり長いので、もう少し発掘で分かっているアイヌ民族の社会史、生活史を、例えば、第7章のところに入れていくことで補えるではないかというこ

とだと思うのですが、越田委員や中田委員から補足はございますか。

越田委員

○　第５章までが、主体がずっと「人々」で来ていまして、第６章になりますと、北海道の人々ではあるのですが、道南に入ってきた和人系の人々とか、松前藩であるとか、それが主語になるので、北海道島の人々がどうなったのかということを示すコラムがあった方が良いと思います。第 10 章でまとめるだけではなくて、この関係する部分に入れないと、最後の 10 章のところに来るまで、館の成立する時期に北海道島の人々がどのような暮らしをしていたのか、コタンの様子がどのようなものかなどが分からないわけですよね。

○　あくまでも政治的な動き、経済的な動きだけで動いてしまうので、こういう３つのコラムを、全部まとめなくてもいいと思うのですけれども、バラバラにでも入れさせていただくと、アイヌの人たちの暮らしの様子が少し分かってくるのではないだろうかというのが、私が提案した意図になります。

蓑島委員

○　内容的には第 10 章の第２節と重なる部分はありますよね。

越田委員

○　多少、本文にも入ってくると思うのですが、この３つのコラムを、一緒でなくても良いと思いますので、その項目のところに合わせて入れていただけると、北海道に住んだ人々の暮らしの様子がわかるのではないかと思います。

○　それを更にまとめて第 10 章で述べるという構成ではどうかと思いまして、こういう提案をさせていただいています。

松本委員

○　分かりました。ありがとうございます。

谷本小部会長

○　私はコラム 40 で、今の話を文献からのアプローチで書こうと思っていまして、重複するのでここはなくても良いということになると思うので、ここはもしページ数が超過したらコラム 40 はやめるようと思います。

○　このような進め方でよろしいですか。

蓑島委員

○　越田委員と中田委員の方で、今、話題になっている３つのコラムをどこに入れるかについては、今あるところが良いですか。

中田委員

○　書き方にもよると思いますが、近世だけではなくて、具体的に例を挙げますが、ユカンボシC15 だともう少し古いのではないかと思います。中世アイヌ文化期とか近世アイヌ文化期であったりするのですけれども、近世でも古い方、あるいは中世末のあたりの人の暮らしにも、どこかで触れていただければと思います。場合によっては、今３つ（のコラム）はまとまっていますけれども、分かれてしまうかもしれませんね。

谷本小部会長

○　これは便宜的にここに置いているだけなので、この３つをどこにするか、また、散らし方が良いのか、この第７章のコラムが肥大化してしまうのは少しおかしいので、別のどこかに置いて、後の時代もそこで述べれば良いのではないかと思います。

蓑島委員

○　基本的には、第５章は第１節から４節までありますので、この中に特出しするのがいいのか、それとも地の叙述のところに入れ込んでいくのがいいのかというところで、中世の暮らしについては、例えば第１節のところに少し厚めに書いて入れるとか、いろいろできるのかなと思っていたのですけれども、コラムで特出しするとなると構成の問題が出てきますので、いかがでしょうかね。

越田委員

○　このことを提案した時に考えていましたのは、コタンの様子でも、Ta-b 火山灰（1667 年降下）の下になります。それから特にチャシの場合には、ユオイ、ポロモイを特出ししておくと、シャクシャインの戦いの時、アイヌ社会はこういう状況だったのだということが分かるものになるのではないかと思います。

○　木製品の方は、美々８（遺跡）は樽前ｂ火山灰後までありますので、もっと後で出てきますと、例えば、漆器と蝦夷細工もありますけれども、こういうところにアイヌの工芸というような形で入れていただけたら良いかなという気もしております。

○　どういうことを書けるのかということになるのですが、本州から入ってきた鉄器などを使って、アイヌの人達が、こんなものを作っていましたということ、それが、繊維製品であったり、木製品であったり、そして、自分たちの彫刻に漆を塗ったイクパスイといった融合的なものもあるということを、３つ目の、木製品の中では述べていきたい気がします。

○　こういったことで、やはり第７章に入れさせていただけたら良いかと思いますし、「発掘されたコタン」は、場合によっては第６章のあたりに入れるか、あるいは第５章の土器製作の終焉の中で、中世からまとめてしまうかと考えています。

谷本小部会長

○　ちょうど「勝山館遺跡の世界」があるから、そこにコタンを一緒に並べると分かりやすいかもしれませんね。

蓑島委員

○　発掘された木製品、例えばユカンボシにしても美々８にしても、少し幅があるということですけれども、クロニクルという考え方からすると気持ち悪いですが、ここに入れておいて、コラムですから、多少、融通を利かせられるというか、近世のところに入っているコラムだけれども、中世からあるのだという説明はできると思うのですね。そのように考えていただけると、構成の上でも融通が利くと思いますので、そこも相談しましょう。

越田委員

○　どういうことを書くかということを考えながらですね。

谷本小部会長

○　３つのコラムはどこかに入れるということで、３月までに調整することにしましょう。

越田委員

○　コラムを後半に入れさせていただけるということで考えたいと思います。

谷本小部会長

○　北海道島の人々がどうなったか見えるようにすることは、良いことだと私も思います。

蓑島委員

○　例えば、第４章にコラム 14「擦文期の木製品」がありますから、ここに関連で中世のものまで降ろして書くようなことは少し厳しいですか。

中田委員

○　祭祀具などがはっきりとは出てこないので、繋ぎにくい面がありますね。

越田委員

○　最近出てきた丸木舟なんかもありますし。

蓑島委員

○　コラム 22 の「宗教儀礼の系譜」には、木製祭祀具は想定していませんでしたか。

中田委員

○　どちらかというと和人の方を想定していましたが、どこまで言えるのかということがあります。

蓑島委員

○　宮ノ沢川、勝山館のあたりは、コラム 24、やはり第５章にもう１本、中世木製品のコラムを置いたら、それにこしたことはないのでしょうけれども、そうなると、ここが肥大化してしまうので、工夫があった方がいいような気がします。

越田委員

○　コラム「勝山館の世界」では、そこで出てきたイクスパイなどには触れられますか、それよりはもっと政治的な記述になりますか。

川上委員

○　これは遺跡の世界で、物質文化と思いますので、私よりも、越田委員か中田委員にお願いした方がいいと思っているのですけれども。

谷本小部会長

○　それでやっていただけるのであれば良いと思います。

川上委員

○　政治的なことだと他のところで書かれますから、物質文化中心でよろしいかなと思うのです。

越田委員

○　コラム 23 と 24 が繋がってしまうことになりますね。

谷本小部会長

○　コラムを１つにすると、増えたコラム３つのページを回収できる余地が増えていきますね。

蓑島委員

○　これらを１つにするとき、第４章に置くか第５章に置くか、第６章に置くかでニュアンスが少し変わりますよね。

越田委員

○　近世までは行ってないですよね。

川上委員

○　コラム 23 に勝山館をまとめた方がいいと思います。

谷本小部会長

○　これは 16 世紀ということで入れているので、コラム 24 が「発掘されたコタン」に変われば良い。

越田委員

○　コラム 24 の内容を 23 に含めればいいのですね。そうすると移り変わりがすっきりいくかもしれませんね。

谷本小部会長

○　チャシはここに入れてしまいますか。

越田委員

○　チャシは第 7 章のところでどうでしょうか。ユオイ、ポロモイなどはここが核心部になりますので。

谷本小部会長

○　木製品のコラムは、まだ場所が決まっていないですね。

蓑島委員

○　幅広いですので。蝦夷細工とペアにするのも手ですが。

谷本小部会長

○　コラム 38 の次に「発掘された木製品」、時代は 18 世紀になってしまうのですけれども、そこで全体を書いてくれてもいいかもしれません。

蓑島委員

○　メカジキの線刻のある船の櫂はいつでしたか。

越田委員

○ 0 黒層ですので、Ta-b 火山灰（1667 年降下）の上、Ta-a 火山灰（1739 年降下）との間ですね。

中田委員

○　美々８を中心とすると、コラム 38 のあたりになりますね。

谷本小部会長

○　これで決まりましたね。多少、時代が前後しても、もちろんそれは厳密な年代順ではなくても良いと思います。

越田委員

○　美々８の木製品に触れるのであれば、札幌越え新道の話と絡むところに、船などを置いておくと面白いと思うのですよね。ちょっと時代的には遺物が古くなるのですけれども。

○　文化年間の山田文右衛門による開削でしたか、そのあたりの話と、松浦武四郎の『再航蝦夷日誌』にみえる「美々憩所船乗場の図」にみえる建物と考えられる遺構も出ているので、札幌越え新道に繋がる歴史の中で語ることができると、美々８の遺物が一番生きてくるのかなという気はしています。

谷本小部会長

○　それではこの第７章で良いのではないですかね。これでスペースを少し調整して、入れられるようにしましょう。

○　章節の表現については、皆さん、もう一度後で御覧いただいて、３月までもし修正が必要であれば、おっしゃってください。

○　あとはよろしいでしょうか。それではそのような形で進めていただきます。

○　今回、具体的な調整もできて良かったと思いますので、あとは各章の担当者間、前半と後半で、目次案とコラムの検討を進めていただきたいと思いますのでよろしくお願いします。

谷本小部会長

○　次に、議事（２）として今後のスケジュールについて確認をしていきたいと思います。資料２ですが、企画編集部会が５月にありますので、これに間に合うように、先ほどから話題になっていますけれども ３ 月上旬をめどに、目次の調整をして、３月のどこかで小部会案を確定する必要がありますので、次回、第２回の小部会は、この３月中の後の方のタイミングで、調整をできればと思っています。

○　これも先ほどから確認して懸案となっています執筆要領ですが、図をどうするかといったことなども含めて、これは事務局の方で整理、提案いただきたいと思います。

○　今後のスケジュールについてですけれども、この資料２にありますように、３月に小部会案を作る、それから５月の１回目の企画編集部会でこの目次の小部会案を確認していただき、それから執筆要領もそこでは審議にかかる、そこで出た意見を踏まえて中身を検討したものを、もう一度６月に企画編集部会で審議をして、決定するということです。

○　先ほど、変更の余地に関する話もありましたが、形式的にはここで決まって、そして８月に

道史編さん委員会、親会が開かれて、ここで目次案、執筆要領案が審議されて、ここで確定、公開ということになりますか。

立澤主幹

○　節目の各部会の資料も公表になります。

谷本小部会長

○　令和７年８月に公開されたものがいわゆる最終案ということになりますね。

立澤主幹

○　公開されるものとしては、道史編さん委員会の資料、８月に提示されたものが最新版として、それに基づいて執筆している形になります。

谷本小部会長

○　執筆がこのままいけば、ここから１年と少しで書いていただくことになって、ここに書いてあるように、閲読、校閲があります。

○　閲読は編集長まで行くのでしたか。

立澤主幹

○　それは企画編集部会になります。まずは概説部会又は前近代小部会、クロニクル担当者の皆様に、部会を開くなりしてチェックしていただくことを想定しています。

谷本小部会長

○　令和９年に入って原稿審議が２回あって、道史編さん委員会、親委員会をやって、この原稿でいくと決まるのが再来年、令和９年３月で、その後、校正に入って、今のところ令和 10 年３月に刊行ということになっています。

○　今のところの計画はこのようになっていますが、これに関して何か確認しとくべきことはありますか。

○　下巻は今、どのような感じでしょうか。

立澤主幹

○　下巻は目次を作成中ということになっております。

谷本小部会長

○　下巻もこのスケジュールで進んでいくわけですよね。

立澤主幹

○　下巻を担当する近現代小部会でも同じ資料を委員の皆様に共有いただいておりますので、基本的これと同じ形で進んでいます。

谷本小部会長

○　下巻との調整はどのようにしますか。

立澤主幹

○　12 月の近現代小部会では、概説部会を開催して委員が集まって検討することはしないで、小部会で進めていって、何かありましたら各小部会の代表者で打ち合わせればいいのではないかという議論は出ております。

谷本小部会長

○　概説部会があるから、原稿のすり合わせは、ここで出来るということなのですね。

立澤主幹

○　執筆が終わった後はそうですし、執筆開始前でも企画編集部会に向けて打合せは進めて良いと思います。

谷本小部会長

○　先ほど、蓑島委員から指摘があった序文について、上巻と下巻で調整が必要になるかもしれません。

○　他に何か確認することはありますか。

○　口絵や年表をどうするかということは、どのタイミングになりますか。

立澤主幹

○　本文に入れ込むのか年表なのか口絵のように、別にするかで変わってくると思うので、本文に表として入れるのであれば、400 ページの中に入ってしまうので、年表の扱い方が難しいという話も聞いておりますので、執筆要領案に盛り込む時に相談させていただきたい。

越田委員

○　「時代」にするか、「文化期」にするかは、執筆要領に書かれますか。

谷本小部会長

○　そこまで細かく書きますか。

立澤主幹

○　どちらかというと、章立ての方で考えていただければ、どちらかにするのか、併記するのかなどですね。

越田委員

○　年表を載せるのであればそれと一緒にしなくてはいけませんね。

川上委員

○　索引を各巻か、上下巻まとめるかということなのですけれども、索引は各巻で独立していた方が使いやすいと思うのですけれども、いかがでしょう。

立澤主幹

○　それぞれ１冊の本になりますので、そのようにいたしたいと思います。

谷本小部会長

○　参考文献一覧のところも、例えば章ごとに参考文献を書くのか、最後にまとめてしまうのか、執筆要領に関わってくると思いますが。

立澤主幹

○　通史編では、最後にまとめてという執筆要領案になっておりまして，それが一番ページの節約になると思っております。

谷本小部会長

○　そこも執筆要領に組み込む必要がありますね。

○　他にはいかがでしょうか。

越田委員

○　執筆者調整中の方にあたるのはいつの段階がよろしいでしょうか。

立澤主幹

○　委員の数を増やす話は、この章立て案が確定した後に、企画編集部会に向けて、どんな人にどのような立場で書いていただくのか、委員に就任いただいて執筆するということが基本ですけれども、それでは、コラム１本だけお願いしますといった頼み方が難しくなるところもありますので、委員以外の方に執筆を頼む方法が考えられるのか整理させていただきます。

○　その上で、章立てが固まった後ぐらいに、整理した考え方に基づいてお願いする形になるかと思います。

谷本小部会長

○　打診も待った方が良いですね。まだ、何ページとも決まってないですし、執筆要領がない。でも、頼みたいっていうことはどうでしょうか。

立澤主幹

○　委員に就任をお願いしたいという依頼はできないです。

谷本小部会長

○　「お願いすることを考えている」くらいは匂わせて、前半だと調整中の方が多くいらっしゃいますよね。

○　ですので、直前になって言う形にならないように、もう少し早い段階で、今ごろから、打診の打診ぐらいはしておいた方が良いような気がします。コラム１つくらいでしたら、まだ大丈夫だとは思いますけれども、そこは差支えない方向で、話題にしていただくくらいならよろしいですか。

立澤主幹

○　はい。

谷本小部会長

○　他にはいかがでしょうか。

○　議題としていたところは以上になるかと思いますが、質問等ございますか。

蓑島委員

○　中田委員の先ほどの「中世の木製品」をコラムで立項できればというお話は、他にも立項したいけれども、今回は見送ろうかといったものがいくつかあると思うのですけれども、そういう中で、第５章に「中世の木製品」というコラムを、ぜひ立項したい、優先順位が非常に高いとお考えなのであれば、バランスを考えて御相談ということになるかなと思います。

中田委員

○　それほど高くはなくて、むしろ、勝山館の中で宮ノ沢右岸（出土品）を一緒にしてしまうとか、ただ、ユカンボシなどをうまく結びつけにくいことがありますので、そんなに優先順位を高くしていただかなくても良いと思います。

蓑島委員

○　ありがとうございます。もう一つ念のためよろしいですか。

○　「発掘された木製品」のコラムをどこに置くかで、最後に谷本小部会長は第７章が良いとおっしゃったと思うのですけれども、第８章でよろしいですか。

谷本小部会長

○　第８章のコラム 38 の後ろあたりです。７と８の間違いでした。

蓑島委員

○　ありがとうございます。

谷本小部会長

○　実質的な議論が出来てよかったです。

○　他にはいかがでしょうか。川上委員、何か確認すべきところはありませんか。

川上委員

○　今更ということになるかもしれませんが、読む人が一般の方ということで、例えば、序の第２節、「研究のあゆみ」のところは、「北海道史のあゆみ」のように、なるべく「研究」とか専門的な用語は使わない方がいいのかなと少し思ったのですけれども。

蓑島委員

○　北海道史研究の歩みと思っていたので、それを分かりやすく表そうと思っていたのですけれども、「研究」という言葉を例えば置き換えると、「北海道史をどうとらえてきたか」といった感じでしょうか。

川上委員

○　その方が、より親しみやすいと思うのです。

蓑島委員

○　特に章節のタイトルだから、あまり専門用語は使わないようにしようということでもありますか。

川上委員

○　そうですね、中身ももちろん易しく書く必要があると思うのですが、初めに読む気がするかしないか、そういうところからいくと章節もわかりやすい言葉で、なかなか難しいかなと思うのですけれども。

蓑島委員

○　「北海道史はどうとらえられてきたか」

谷本小部会長

○　「北海道史の見方」とか、あまり長すぎてもとも思いますが、ブラッシュアップしていただけるところもそれぞれあるような気もします。

○　私のところもいくつか、「戦後処理」とかはあまり良くないなと今、実は思い始めていまして、単純に「シャクシャインの戦い」だけでいいのかなとも思っておりまして、これは少し考えます。

○　それぞれそういった部分があると思います。今、川上委員に御指摘いただいたことは、全部に関わる表現、分かりやすい表現としてどういうものが良いかっていうことに関わってくる。これをそのままベースにしていきますが、微修正、こちらの方が分かりやすそうだというものがあれば、前半、後半の中で、調整をしていって、取りまとめていただければと思います。

○　このような検討を次の小部会に向けて進めたいと思いますので、よろしくお願いします。

○　次回の小部会の日程ですが、先ほどこれも話題になりましたけれども、３月の後半ということで、年度末でお忙しいと思いますけれども、ご調整よろしくお願いします。

○　予定していた議事は以上になりますが、全体を通して、御質問、御意見、御確認等はございますか。よろしいですか。

○　事務局の方から何かございますか。

菅井室長

○　長時間にわたり、ありがとうございました。いろいろな観点からご議論いただいたと思っております。目次案の作成ですが、執筆する内容をイメージしながら進めるということでは、皆さんに先のことの作業も含めてお願いできればと思っておりますし、３月までということで期間が短いですけれども検討させていただいて、事務局の方でもお手伝いをさせていただきたいと思いますし、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

３　閉会

立澤主幹

○　以上で、前近代小部会を終了いたします。お疲れ様でございました。